

鹿大広報

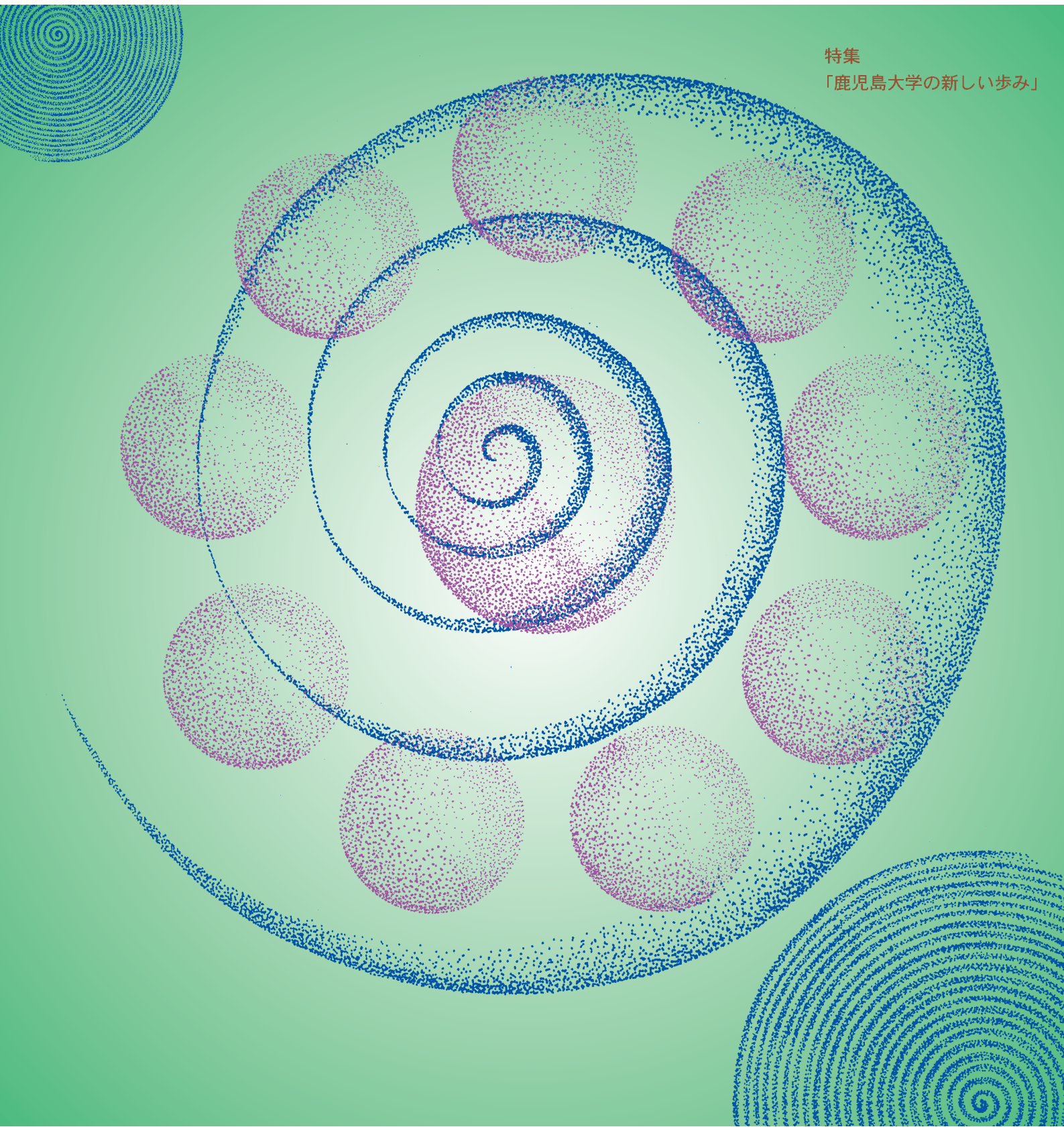
No.145

Sep/1997

編集・発行
鹿児島大学
広報委員会

特集

「鹿児島大学の新しい歩み」



■歯学部の方角



一般教育の実施主体であった32年の歴史をもつ教養部が発展的改組に伴いその幕を降ろした平成9年4月1日は、私共の学部にとっても正に歴史的な日であった。この理由は、私共医系の学部が考える大学を卒業させる価値あるいは大学教育でなければならない意味は、単に今後は医療の世界に職業人として飛び込んでゆける基本的能力を身につけさせたと云うだけではなく、現世の森羅万象すべてに対し大学で学んだだけの見識を発揮できる能力を習得させることをも含んでおり、これが将来の良い研究者・教育者を包含する良質の歯科医療人の卵を社会に出す正道であると信じているからである。

一般教育を担当する責任部局がなくなるとは、私共の学部にとっての教育に関し根本から考え直す必要のある衝撃的で悲しい出来事であった。不幸中の幸いであったのは、この改組に伴って私共の学部にも歯科基礎科学講座が新設されたことである。この講座の持

歯学部長 笠原 泰夫

つ役割は歯学部学生に対しては一般教育について他の学部にも所属する先生方の協力を得ながらその企画・立案・実施の主体として、また専門教育との懸橋となるオルガナイザーとして、更には歯学部の専門教育を十二分に加味した新しい意味での歯学部の独創的な一般教育とこれに附随する研究領域の確立を、全国国立大学歯学部にも設置された只一つの講座として模索することである。これに加えて大学院歯学研究科の博士課程と歯学部の最終学年の専門教育課程の一体化、ならびに相互乗り入れなどを念頭に置いて歯学部の今後の方向を鋭意模索中である。

以上の様な改革が現実のものとなり実施された場合、私共鹿児島大学歯学部を卒業した学生の持つ資質は大変高くなることが予想され、有能かつ学問的にも優秀で人間としても魅力的な極めて良質の歯科医療人を社会に送り出せるであろうと確信し、その実現のため全力を傾注しているところである。

■工学部の改組後の取り組み、組織の内容および目標とするビジョン



平成9年度に工学部に生体工学科が新設された。機械工学科、電気電子工学科、建築学科、応用化学工学科、海洋土木工学科、情報工学科に生体工学科が加わって7学科編成となった。情報工学科の学生定員が20名増え、工学部の入学定員は500名になった。

教育面での改良点としては、新入生向けに物理学の補習教育を導入したこと、4年一貫教育体制を整備したこと等があげられるが、今後4年一貫教育を維持し一層充実させていくためには、全学的に共通教育の維持体制を整えることが急務であろう。

入試制度の面では、これまで編入学は高専のみを対象としていたが、平成9年度より、学力による選抜では出身学科を問わないことにした。また編入学制度を推進するため、編入学生の定員化を計画しているところである。

工学研究科では博士前期課程の学生定員を大幅に増やして1学年の定員を138名としたが、それでもなお大学院への進学者は定員を

工学部長 赤坂 裕

上回っており、学部学生のほぼ3人に1人が大学院に進学している状況である。いっぽう留学生の大学院への入学者数も増加し、かつ安定してきていることから、大学院に留学生の定員枠を設けることを計画している。なお後期課程は平成6年度に新設され、平成9年3月には第1回の博士（工学）取得者が23名誕生した。研究科における次なる充実目標は工学研究科を理工学研究科に発展させることであって、この問題については理学部と協力して準備を行っている。研究施設面では、平成9年度の秋に約4500㎡、7階建ての工学研究科棟が着工になる予定である。

大学設置基準の大綱化に伴い、鹿児島大学はこれまで段階的に組織改革を推進してきたが、今後、組織の点検・評価を前提とした更なる改革が要求されている。このような改革は全学的な協力なくしては達成できない。工学部は、今後とも全学的な改革との調和をとりながら、学部としての改革を推進していく方針である。



研究室紹介

歯と顎のディスクレパンシー

歯学部歯科矯正学講座 教授 伊藤 学 而



ディスクレパンシーと言うのは、矛盾、不一致、食い違いという意味の言葉です。歯の大きさと歯が生える顎骨の大きさに食い違いがあると、歯はきれいに配列できなくて歯並びや噛み合わせが悪くなります。

歯並びや噛み合わせの整っていない状態を、歯科では不正咬合と呼んでいます。不正咬合を作り出す要因には、歯と顎のディスクレパンシーのほかに、上下の顎骨のディスクレパンシー、噛み合わせたときの顎のずれ、唇や舌の癖、歯の形成異常などがあります。様々な不正咬合はこれらの要因の組み合わせによって決まりますが、要因のうちで最も多いのが歯と顎のディスクレパンシーです。

不正咬合の頻度は、今の日本人で6割から7割程度と推定されます。不正咬合があると単に口もとが整っていないだけでなく、歯肉炎、齲蝕、顎関節症などの歯科疾患にもかかりやすいとされています。そこで私達の研究室では、歯と顎のディスクレパンシーを中心にして、その成りたちや影響に関する調査や動物実験を行ってきました。

昔も今のように歯並びの悪い人が多かったのだろうか。まず、この素朴な疑問を確かめるために、東京大学、京都大学、九州大学、長崎大学に保管されている日本人古人骨の標本を調べました。その結果、顎骨の大きさは時代が下るにつれて小さく華奢になり、これに伴って不正咬合の頻度も縄文時代の22%から江戸時代の56%へと増加し、歯科疾患の罹患状況も時代によって変動していることが確認されました。

この原因はおそらく食生活の変遷にあると考えられましたので、全国6地区において、昭和元年生まれから40年生まれまでの5世代について、食生活と歯や顎骨の大きさ、不正咬合との関連を調査しました。地域による差はありますが、昭和30年生まれ世代以降、食生活が大きく変化し、それが顎骨の大きさ、歯と顎のディスクレパンシー、不正咬合に影響を及ぼしていることが確かめられました。このことは、その後に行ったオーストラリア、

ニュージーランド、ケニアにおける調査でも確かめられております。

そこでマウスに固形、練状、液状の飼料を与えて離乳直前から成長終了まで飼育し、頭蓋、顎骨、顎関節、唾液腺、歯の磨耗、顎の動き、顎筋の筋線維、顎筋の筋電図などを調べました。結果として、飼料の性状が違えば上記の全ての発育に影響が及び、特に液状飼料で飼育した場合には咀嚼や嚥下の発達が阻害され、臼歯で咀嚼しないために歯の磨耗は少なく、顎骨は細く華奢で、顎筋の筋線維は疲労しやすく、歯ぎしりなどの習癖がおこり、唾液の分泌が低下し、顎筋の協調性が劣ることが確かめられました。また生育途中で飼料を変更しても、十分なキャッチアップができにくいことも確かめられました。

これまでの研究から、現代の食生活が乳幼児期からの口の機能と顎骨の発育に遅れとアンバランスをもたらす、それが不正咬合だけでなく、咀嚼、嚥下、唾液分泌などの生理機能の発達にも重大な影響をもたらすことが明らかになりました。これらのことが疫学調査と動物実験によって裏付けられたことは、世界的にも初めてのことです。

咀嚼、嚥下、唾液分泌などの機能が十分に発達しなければ、口内細菌が過剰に増殖して齲蝕や歯肉炎にかかりやすくなることは容易に考えられます。また顎関節や顎筋の発達が低く、しかも歯ぎしりなどの習癖があれば、顎関節症にもかかりやすくなります。今は食生活とこれらの歯科疾患や顎機能障害との関連について、研究を進めているところです。

